

建設業従事者の歯の喪失に自己効力感が及ぼす影響

著者	吉野 夕香
学位名	博士（歯学）
学位授与機関	北海道医療大学
学位授与年度	令和2年度
学位授与番号	30110甲第354号
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00064964/

論 文 要 旨

建設業従事者の歯の喪失に自己効力感が及ぼす影響

令和2年度

北海道医療大学大学院歯学研究科

吉野 夕香

要 旨

【緒言】

口腔と全身状態の関連が数多くの研究で指摘されているが、その中でも喪失歯は全身の健康状態、生命予後、QOLなどに影響し、口腔に関連する最も重要な要因の1つであるといえる。歯の喪失防止については、8020運動をはじめとして、高齢者を中心に組み込まれてきたものの、より若い年代からの予防の重要性が指摘され、健康日本21（第二次）では働き世代である40代の歯の喪失状況に関する目標が設定されるようになっている。

保健行動をうまく実行できる信念である自己効力感（Self-Efficacy：SE）は、ブラッシングの頻度、デンタルフロスなどの歯間清掃の実施状況、定期受診の有無、歯科治療の継続性などの口腔保健行動に加えて、歯垢の付着状況、歯肉出血、歯周病の進行状況との関連が指摘されている。しかしながら、これらSEと口腔保健行動、口腔衛生状態との関連を検討した研究では長期的な影響を検討した研究は少数で、歯の喪失との検討は行われていないのが現状である。

そのため、本研究は、SEによって歯の喪失状況や口腔衛生状態および口腔保健行動が長期的に予測できるかどうかについて、企業健診においてほぼ全員健診が達成できている、北海道某町内の建設業従事者を対象とした調査を実施し、検討を行うことを目的とした。

【方法】

北海道某町内の建設業従事者で、2009年から2018年に企業健診の一環として実施する歯科健診の受診者425名のうち、（1）2009年から2014年のいずれかの時点で歯科健診を受診し、（2）（1）の歯科健診から5年後の歯科健診を受診した者160名を対象とした。対象者のうち、（1）無歯顎者、（2）アンケート未回答者、（3）初回の歯科健診時点で45歳未満の対象者を除外した61名を分析対象とした（男性：54名、女性7名、平均53.68±6.03歳）。

分析に用いた指標は、喪失歯数、Community Periodontal Index（CPI）、Simplified Oral Hygiene Index（OHI-S）のSimplified Debris Index（DI-S）およびSimplified Calculus Index（CI-S）、Self-Efficacy Scale for Self-care（SESS）の下位尺度（ブラッシング、歯科受診、食生活）、定期受診の有無、ブラッシング回数、喫煙の有無であり、歯科健診および自己記入式の質問票によってデータを収集した。

初回歯科健診の喪失歯数および5年後の喪失歯数を従属変数とし、性別、年齢、初年度

の定期受診の有無，ブラッシング回数，喫煙の有無，SESS の各下位尺度，CPI，DI-S，CI-S を独立変数とする重回帰分析を行った。同様に，初年度から 5 年後の喪失歯の増加数を初年度の喪失歯数で割った喪失歯率を従属変数とした重回帰分析および 5 年後の CPI，DI-S，CI-S，ブラッシング回数を従属変数とした重回帰分析，5 年後の定期歯科受診を従属変数とするロジスティック回帰分析を実施した。

【結果】

5 年後の喪失歯数を従属変数とした重回帰分析の結果，年齢，喫煙の有無，CPI に加えて，ブラッシングの SE で有意な標準偏回帰係数が得られた ($\beta = -0.34$, $p < 0.05$)。喪失歯率を従属変数とした重回帰分析の結果，ブラッシングに関する SE のみで有意な標準偏回帰係数がえられ ($\beta = -0.34$, $p < 0.05$)，SE が低いほど，喪失歯率が高くなることが示された。DI-S を従属変数とする重回帰分析の結果，食生活の SE のみで有意な標準偏回帰係数がえられ ($\beta = -0.33$, $p < 0.05$)，食生活の SE が高いほど，歯垢が少ないことが明らかにされた。定期健診の有無を従属変数とするロジスティック回帰分析を行ったところ，歯科受診の SE で有意なオッズ比がえられ ($OR = 5.38$, $p < 0.05$)，歯科受診の SE が高いほど定期健診に通っていることが示唆された。

【考察】

本研究の結果から，ブラッシングに関する SE が喪失歯数および喪失歯率と関連していることが明らかにされ，ブラッシングに関する SE は歯の喪失に影響を与えることが明らかとなった。また，食生活の SE が歯垢の付着状況に，歯科受診の SE が定期受診の有無に影響を与えており，口腔衛生状態や口腔保健行動に対しても SE が影響を及ぼしていることが示された。以上のことから，ブラッシングおよび歯科受診，食生活に関する SE を向上させる取り組みを行うことによって，将来の口腔衛生状況や口腔保健行動の改善，歯の喪失防止につながることを期待される。

【結論】

SE が歯の喪失に与える影響を検討するために，5 年間の縦断研究を行った結果，ブラッシング，歯科受診，食生活に関する SE が，将来の歯の喪失，口腔衛生状態，口腔保健行動に影響していることが示唆された。